



## 治安② 消防

### 私設消防より出発



置戸初めての消防ポンプ車（昭和8年）

北海道は年間の約3分の1を積雪厳寒の中で生活するため、火気を使用する機会が多く、加えて建物のほとんどは木造でしたので、他府県に比べ高い頻度で火災が発生していました。このため、火災対策は重大事として取り扱われる一方、開拓初期の消防には、当時よくあった脱獄犯の警戒など、治安に貢献する仕事も加味されていました。

北海道における消防組織は古く、文化3年の函館火災のあと、出火消防常雇を置いたのが始まりとされています。その後、開拓使が設置されると、道内に6つの義勇消防組が設置され、これが公設となって後年にまで及びました。また、明治27年に全国統一消防組規則が公布され、消防組が置かれるようになりましたが、この消防組を設置する場合は知事の認可が必要で、組頭、小頭の任免は警察署長が行い、消火活動も警察官が指揮監督にあたるというものでした。また、消火に必要な道具、建物は市町村がまかなわなければなりませんでしたが、村費の支出は極めて微々たるもので、

大半は関係住民の寄付によってまかなわれるのが普通でした。

置戸で最初に消防組が組織されたのは明治44年のことでした。鉄道は同年9月に正式開通となりましたが、消防組が結成された8月には置戸の市街戸数も70戸を数え、工場もあったので火災が心配されていました。鉄道工事関係の仕事も辞め、置戸に落ち着くことを決めた河西貴一氏は、黒沢下駄工場で働く10数人をはじめ周辺の人に呼びかけ、自ら組頭となって毎晩夜警をやって1日50銭をもらい、これを貯めて消防はんてんを作り、手押しポンプを置戸駅から借用して、私設消防団を組織しました。結成にあたっては各戸募金のほか、当時造材などを営んでいた内田三之助氏が7円50銭の竹はしごを寄贈するなど、市街あげての応援があったようです。当時、火災がどの程度あったか記録はありませんが、建物構造から推してそれなりに活躍の場があったものと推測されます。

（参照：置戸町史上巻）



## もうすぐ結成1周年

### 手芸倶楽部



町内の手芸好きのママなどが結集して昨年の1月に誕生したハンドメイドサークル「手芸倶楽部」。現在、メンバーは8人で、それぞれが得意とするニットや雑貨、アクセサリなどを手作りして、ワンデイショップや手作り市に出店しています。基本的にはメンバーそれぞれが商品を自宅で製作し、グループで出店するスタイルで、子育てなどに忙しい中でも出店できると始めましたが、リピーターやオーダーもあり、「声をかけてもらえると嬉しい」と予想外の励みになっています。代表を務める安藤泉さん（写真）は、今月の結成1周年を控え、「これからもみんなで楽しみながらより良い商品が作れるように頑張ります」と抱負をコメント。メンバーの作品は、2月8日、9日にぽっぽで行われる「キッチンファクトリー」でも販売予定です。

